



本会元理事長 礪波護先生を偲ぶ

本会元理事長、礪波護先生が、令和六年十一月十三日に、数え年八十八歳で急逝された。十月二十六日に東洋史研究会大会にお見えになったばかりだったから、来会者は誰もが驚いたことであろう。ここに、謹んで哀悼の意を捧げる。

先生は、昭和十二年九月六日、大阪府布施市（現東大阪市）で真宗大谷派究竟寺の住職礪波恵水・綾子ご夫妻の次男としてお生まれになった。昭和三十一年に大阪府立八尾高校を卒業後、同年京都大学文学部に入学され、東洋史学専攻に進学、昭和三十五年卒業された。卒業論文「唐宋の変革と使職―三司使の成立について」は修士課程在学中に題名と副題を入れ替えて本誌四十四巻

四号に掲載され、『歴史学研究』で堀敏一氏によって紹介された。昭和四十年に博士課程を出られるとすぐに人文科学研究所の助手に採用された。四十六年に神戸大学文学部に出向して助教授となり、五十年に人文研助教授に配置替、五十九年に教授に昇任された。六十一年に刊行された『唐代政治社会史研究』（同朋舎出版）によって翌年博士号を授与された。また、五年間に亙って主宰された共同研究班の報告集『中国中世の文物』が平成五年に刊行された。両書ともまもなく海賊版が出るほど海外でも注目を集めた。

平成五年、文学部教授に配置替（研究所教授を一年併任）、八年に文学研究科教授となられた。十年に史学研究会の理事長に就任された時には、東洋史研究会会長、唐代史研究会会長、東方学会常務理事も兼務されていた。さらに、ご定年までの一年間研究科長を務められ、平成十三年に退官、名誉教授号を授与された。

ご退官を記念して編まれたエッセー集『京洛の学風』（中央公論新社）や藤井謙治氏との共編著『京大東洋学の百年』（京都大学学術出版会、平成十四年）にも窺うことができるように、先生の視野は東洋史の分野を越えて学術史全体に及んでおり、平成二年から足掛け十二年間務められた京都大学百年史編集委員会実行委員はまさに適任というべきであろう。

ご退職後は大谷大学に転じられ、平成十五年に創設された大学博物館の館長を十七年から大学をご退職になるまで五年間務められた。そして、平成二十八年には、論考に学界動向や書評なども加えて編まれた『隋唐都城财政史論考』『隋唐仏教文物史論考』、短文集『敦煌から奈良・京都へ』（中国語訳が令和五年に刊行さ

れている）、翌年には『鏡鑑としての中国の歴史』がいずれも法蔵館から刊行された。これらによって我々は先生の文業の概要を知ることができる。なお、中公文庫から先生ご自身の編になる『唐の行政機構と官僚』（平成十年）、『隋唐の仏教と国家』（十一年）、『唐宋の変革と官僚制』（二十三年）が刊行されている。

以上のご著書のタイトルからもわかるように、唐宋変革と官僚制、仏教と国家、文物、都城が先生の研究のキー・ワードであるうち、唐宋変革については、前掲の『史林』掲載論文に見られるように、若い頃に集中的に論じられ、五代を生き抜いた乱世の宰相を描いた名著『馮道』（人物往来社）が出たのも先生二十九歳の時である（昭和六十三年に中公文庫に収録）。その後は、内藤・宮崎両先生の祖述に徹した観があるが、先生が宋代を論じられたらどうであつたらうかと、時に夢想したものである。

仏教と国家については、前掲の文庫本の井波律子氏の解説を引用しておく。「先行研究の弱点を衝き、通説を逆転させようとすると、鋭敏な発想と論証が、スリリングに展開されており、読む者に快い知的興奮を与えずにおかない。」読み込め者であつた井波氏の評言に付け加えるべき言葉を持たない。

都城については、プランだけでなく、倉庫や都を取り巻く関とありあげられた。「隋唐時代の太倉と含嘉倉（昭和五十五年）」を翌年岸俊男氏が「難波の大蔵」でとりあげているように、中国の都城の問題は日本の古代都城を考えるうえで避けて通れない。また、先生は京大に入学して藤岡謙二郎教授主宰の地理同好会に長年の盟友となる応地利明氏とともに入会して以来、一貫して歴史地理に関心を寄せてこられた。本格的な論文としては最後の

「中国の分省地図」（藤井譲治等編『大地の肖像』京都大学学術出版会、平成十九年）は、先生の自信作であつた。

そして、文物にも終始関心を寄せられてきた。前掲の『中国世の文物』所収の「唐代の過所と公驗」は翌年に中国語訳され、「嵩岳少林寺碑考」（昭和六十二年）は三年後に英訳され、さらに復旦大学教授の韓昇氏の編訳になる『隋唐仏教文化』（平成十六年刊行。前掲の中公文庫を上編とする）に収録された。「唐代社会における金銀」（平成十二年）「魏徴撰の李密墓誌銘——石刻と文集との間」（平成十四年）も忘れ難い作品である。今では、唐代史の研究において墓誌などの文物が使われることが当たり前になつてきているが、用意周到とモノへのこだわりにおいて先生の右に出る者はいない。

こうしたご自身の業績に加えて、「宮崎史学」の普及に果たしたご貢献は誰しもが認めるところであらう。平成三年～六年にわたつて岩波書店から先生の主編により刊行された『宮崎市定全集』全二十五冊は、全集文化衰退のなかで、多くの読者に歓迎された。ただ、私が前任校の研究室に置いていた『宮崎全集』を見て、学生が「先生は宮崎市と何か関係があるんですか」と言つたことはいまだに忘れられないし、京大でも東洋史に進学してくる学生の中に宮崎史学に接したことがない者のほうが多くなつてきている。しかし、全集刊行後に先生が次々と文庫本を解説付きで編集されたことは、宮崎史学にアクセスできる可能性を広げるものであるし、先生の解説は、先生の発案によって宮崎全集の各巻に付された自跋とともに、二十世紀日本の東洋史学の歴史を語る貴重な証言となつていく。

このように、学界に大きな足跡を残された先生だが、私にとつては、いつも楽しげで、邪気のない自慢をするオジサンであった（先生は、私を「歳の離れた友人」として遇してくだつたが、母と同じ年の先生をさすがに友人とは思えなかった）。人文研の助手時代に西洋部の会田雄次班長の「封建国家の比較研究」班も含めて八つの研究班を掛け持ちし、吉田光邦氏から「新記録だよ」と言われたことがご自慢であつたが、今でもこの記録は破られていないだろう。研究科長の重任を担つておられた時も、ニコニコしながら「ボクって意外にやり手でしょ」とよくおっしゃつていた。研究所時代、上山春平所長の懐刀だつたと先生に聞かされていたから「意外」でも何でもなかったが、それはともかく、行政的手腕が自他ともに認められていたから、「外様」だつた先生が研究科長に選ばれたのであろう。

いや、先生はどこでも「外様」ではなかった。大きな体に愛嬌を漂わせ、人の懐にスツと飛び込まれた先生だからこそ、宮崎先生や異分野の諸先輩にかわいがられ、学生にも敬愛されたのに違いない。

先生といえば、一澤帆布の手提げ鞆にご自身の文章のコピーを入れて配り歩いておられた姿が真つ先に思い浮かぶ。こうして人を訪ね、博物館の展覧会に足しげくでかける「歩く人」だつた先生がコロナ禍で行動が制約されてどんなにおつらかつたことかと思ふ。

しかし、先生は最後まで、後進への細やかな気配りをされていた。最初に述べた東洋史の大会で羽田亨について渡辺健哉氏が講演されることを知った先生は人を介して「この文章を読んでおく

ように」と渡辺氏に伝えていたと聞く。私自身、先生と最後に言葉を交わしたのは、本誌百六巻四号に掲載された野口優氏の研究ノートが京都刊行の学術誌掲載の中国関係論文を対象とする蘆北賞を受賞したことを電話でお知らせくだつた時だつた。

（中砂明徳）